

2018年度 国際日本文化研究センター共同研究会

<共同研究の目的>

国際日本文化研究センターが最も力を入れているのは、共同研究方式の日本文化研究です。日本文化を研究するためには、関係する個別専門分野ごとの成果が着実に積み重ねられなければなりません。と同時に、専門分野の枠組を越えて、研究者が相互に知見を高めあう場が必要になります。こうした共同研究の場は、総体として日本文化理解の促進に大きな役割を果たすものと考えます。このような観点から学際的な共同研究にウエイトを置いています。

また、日文研の共同研究では、日本と異なる知的伝統にたつ海外の研究者との交流をも重視します。異文化からの視点は研究に新しい展望と成果を与え、また研究のあり方に、よい意味での相対比をもたらします。さらに、国際化の時代を迎えた今日、日本文化研究もまた国際化をはかることで、時代の要請に応えることができるでしょう。

もちろん、日文研の共同研究は、単なる研究成果の交換にとどまるものではありません。専門分野及び知的伝統を異にする研究者たちが研究過程を共有しあうことによって生みだされる創造性、これこそが、日文研の共同研究がめざすところの眼目なのです。

(※奨学生はオブザーバーでの参加となります)

「投企する古典性—視覚／大衆／現代」について (3年計画の3年目)

<研究概要>

今日の学問領域の中で、古典研究は、いささか居心地の悪い場所にある。時代の推移の中で制度的な転変もあり、伝統的なディシプリンや教育を十全に達成することがむずかしい状況が続いている。本共同研究では、この現状を積極的に問い返しながらか、多様な分野の専門家や編集者などに参集してもらい、議論を重ねていくことで、古典研究の方向や古典性のありかを広く考察したいと考えている。分析のカギとなるのは、「project/projection」という語の多義性（投影、投企、突出、プロジェクト研究・立案等々…）である。この研究では、視覚性、大衆性、現代性という観点を軸にしながらか、古典の解析や受容史研究とともに、美術、研究法、教育、現代語訳・翻訳などをも視野に入れ、古典研究が近未来の人文科学に提示すべき、学際的な意味や国際的可能性を追究する。その過程で、日文研の基幹研究プロジェクト「大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出」とも連携を果たし、総体として、前近代の日本文化の基層と多様性を包括的に捉えることへの貢献を企図する。

<研究代表者>

荒木 浩 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

5回

『運動』としての大衆文化』について (3年計画の2年目)

<研究概要>

現在、学術的関心の対象としてあるまんが・アニメーション・音楽等のポピュラーカルチャーの多くは少なくとも'70年代の時点では「抵抗文化」(カウンターカルチャー)と呼ばれていた。しかし、web上などでの「音楽に政治を持ち込むべきではない」「いや、ロックは元々も政治的だった」という論争があったことにも呼応するかのようになり、現在の学術的ポピュラーカルチャー研究は「政治」的文脈、「社会」的文脈をともしれば忌避する傾向が強い。いわゆる「クールジャパン」が官製文化運動であることは自明である。大衆文化はあらゆる政治運動と常に不可分であり、同時に大衆文化そのものが無自覚な政治運動、文化運動としての輪郭を結んできた例も少なくない。

この共同研究はまんが・アニメ等のいわゆるポピュラーカルチャーを下からの運動(抵抗文化)、上からの運動(プロパガンダ、動員)双方として、あるいはその軋轢や野合、そして、大衆文化内において「運動」として捉え直し得る潮流を掘り起こし、評価してみようと思う。恐らくそこには分野ごとに分断され、新しい領域でありながら早くも見通しが利かなくなっている「歴史のダイナミズム」が読みとれるはずである。

大衆文化を政治や歴史から切り離して研究する愚かさから決別したい。

<研究代表者>

大塚 英志 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

4回

「音と聴覚の文化史」について (3年計画の2年目)

<研究概要>

合図、記録、科学、文学、連想、声、言葉、表現。音は人類の文化のなかで多様かつ無限の力を誇ってきた。自然が発し、人が発する音は荘厳にもなれば拷問にもなり快樂にも商売にも、前衛的事件にも科学にもなる。この班は「音楽」の枠を超えて、音に関わる複合的な文化的営みを明らかにしようとする。それは音を受ける聴覚器官から発想を組み立てることでもある。聴覚はその重要性を指摘されながらも、視覚に比べて議論が限定されてきたことは否定できない。しかし昨今は根本からの転換を迫る著作が相次いでいる。

本研究班は音と耳の文化的・歴史的な多様性を学問的な境界を越えて問い直し、今後の議論の礎石となることを期待している。対象とする音源には自然音・空想音から楽器（道具）音、機械音、電子音まで、その文脈としては日常生活から医療、メディア、録音技術、映像、劇場、展示芸術まで含め、現段階の「音故知新」をはかりたい。

<研究代表者>

細川 周平 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

6回

「万国博覧会と人間の歴史」について (3年計画の3年目)

<研究概要>

万国博覧会の歴史は、1851年のロンドンで始まり、主に20世紀前半まで、欧米各地で華やかに展開された。1970年大阪万博は、アジアで初めてその歴史に一步を刻んだ。21世紀に入ると、2005年愛知、2010年上海、2012年麗水、2016年アンタルヤ、2017年アスタナ、2020年ドバイと、広域アジアでの開催が相次いでいる。こうした状況は、万国博覧会の性格が根本的に変化したというよりも、国際社会の世相を如実に映し出すという万博の変わらぬ性格が、見事に発揮された結果と捉えることができるだろう。万博はつねに、人間の営みの来し方を全方位から取り上げ、論じるための重要な素材であり、舞台であり続けている。

本研究は、前段となった共同研究会「万国博覧会と人間の歴史——アジアを中心に」の成果を土台に、国を超え、学術と社会的現場の区分を超えて通用する「万博学」の構築をめざす。「万博学」とは、イベントとしての万博だけを限定的に分析する閉じられた研究のことではない。万博が「人間の歴史」をどう語りうるかを追い求め、それを誰にでも通じる言葉で伝えることのできる知的体系の意である。

<研究代表者>

佐野 真由子 客員教授

<本年度研究会開催予定>

4回

「差別から見た日本宗教史再考—社寺と王権に見られる聖と賤の論理」について
(3年計画の3年目)

<研究概要>

本共同研究は差別や排除という現象を、宗教的な聖なる空間と表裏一体をなすものとして理解することで、従来までの聖なる空間を差別や排除と切り離して論じる宗教学や社寺論の立場を克服することを目的とする。それは聖なるものの名前の下に成り立つ公共空間を、他者の排除や差別の働きを不可避とするものとして捉えることで、差別や排除を極力含まない他者との共存がどのようにして可能になるのかを模索する公共宗教論の新たな試みとなる。

まず被差別部落論を日本宗教史の歴史叙述として読み解く作業として、歴史学者の網野善彦『中世の非人と遊女』(1994年)、および網野の論争相手であった大山喬平や黒田俊雄、横井清、脇田晴子、細川涼一、服部幸雄らの代表的研究をとりあげ、日本の社寺と賤民をめぐる議論において何が論争点とされてきたのかを把握する。

宗教学の最新成果であるアサドからアガンベンやハーバマスのまでの展開の中に、網野を軸とする日本中世史における聖賤論の議論を組み込むならば、どのようにして公共空間が聖と賤の拮抗関係から生み出されてくるかのメカニズムが解明されうると考える。そこにおいて、聖なるものが成立された社寺という公共空間しか問うことのできなかつた神道学や仏教学の日本宗教史が、その成立において差別された賤民の存在を組み込むことで、はじめてその対抗関係の中で公民あるいは国民という社会権を持った存在が生まれ出る過程を読み解く試みとして把握されなおしていく。そのなかで、歴史学や民俗学においていささか孤立的に論じられてきた賤民論・宗教者論・芸能民論といった、聖なる存在ゆえに賤民として蔑視されてきた人々の存在論の分析が大きな主題として浮上する。それは日本の王権と賤民との関係を問う議論へと、天皇制が彼らの出自の由緒として論じられてきたがゆえに展開する。

一方、宗教学の聖賤論および公共宗教論に大きな刺激を与える可能性を有するのが、ジョルジョ・アガンベンの議論である。アガンベンは、デュルケムらの聖概念を世俗概念ではなく、被差別民としての賤民論と結び付けなおすことで、近代の国民国家をはじめとする公共空間が成り立つためには、差別化された賤民の存在が不可欠とされてきたことをドイツ近代の例から解き明かした。ハンナ・アレントの公共性論を差別と排除の側面から読み直したアガンベンの議論は、アレントの見解を平等性の視点から論じたハーバマスの議論と相対立しながらも相補うかたちで、今日の公共宗教論の最前線の議論を形作っている。しかも、穢れをめぐるメアリー・ダグラスの人類学の議論やハレとケをめぐる民俗学の議論との接合へと、その聖賤論をさらに学際的に展開する可能性を含んでいる。しかし、アガンベンやハーバマスの議論は、それが公共宗教論を鋭く論じたものでありながらも、日本のみならず世界の宗教学の分野においてはほとんど言及されないまま、従来の聖俗論の成果から切り離された状態にある。本共同研究においては、日本宗教史の資料研究を踏まえることで、理論的に分立する諸分野の研究成果の接合を試みたい。

<研究代表者>

磯前 順一 国際日本文化研究センター教授
吉村 智博 客員准教授

<本年度研究会開催予定>

5回

「身体イメージの想像と展開—医療・美術・民間信仰の狭間で」について (3年計画の1年目)

<研究概要>

本研究では近世から近代、現代に至るまで、人々が身体イメージをどのように想像して図像化し、また展開させてきたのかを明らかにしていく。研究の独自性は、①人文社会学と自然科学との融合的研究である点、②図像、造形物、儀礼、芸能など幅広い素材を対象とする点、③身体各部位のイメージを分析した後、身体各部位の序列化、そして身体全体のイメージを解明し、段階的に議論を進めていく点、④ジェンダーの視点を取り入れ、新たな視座を提示する点にある。日本の医学に影響を与えた東洋医学、西洋医学のみならず、人類学の研究成果も取り入れ、民間医療における身体イメージも視野に入れる。最終的には、身体異常や奇形に対する偏見、進展を続ける生殖医療技術や生命倫理の議論に関連させて、現代社会を再検討するための素材を提供したい。

<研究代表者>

安井 眞真美 国際日本文化研究センター教授
ローレンス・マルソー 外国人研究員

<本年度研究会開催予定>

4回

「比較のなかの東アジアの王権論と秩序構想—王朝・帝国・国家、または、思想・宗教・儀礼—」について
(3年計画の3年目)

<研究概要>

古代以来、東アジアの諸国・地域においては、中華帝国の圧倒的な影響下に、律令制などの政治的・国制的なシステムとともに、ソフト面でも、漢字・漢文や儒教、中国仏教などの思想文化を共通の基盤として受容してきた。それと同時に、中華帝国を一つのモデルとしながらも、それぞれ独自の王朝や国家を形成してきたことは、最早、贅言を要すまい。伝統的な中華帝国は、ほぼ二千年の長きに亘って、その命脈を保ちつつ、同時に歴史的には、自身の内実や面貌をさまざまに変容させながら、一面で現代に至る独自の文明圏を形成している。他方、その周辺地域においては、如何なるかたちで、自己の独自性を演出しながら、王朝や国家の形成を図ったのであろうか？ 広く東アジアにおいて、儒教や仏教などの思想・宗教が、各々の王権や地域社会に対して果たした役割を、儀礼的・象徴的な側面を含めて、検証し直すとともに、更に必要に応じて、他の文明圏との比較も試みたい。

<研究代表者>

伊東 貴之 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

6回

「近代東アジアの風俗史」について (3年計画の2年目)

<研究概要>

日本人の暮らしは、西洋化されてきた。とりわけ、衣生活はその傾向が、いちじるしい。すまいでも、今日、畳は床からきえだしている。食事でも、舶来のメニューは、そうした数にのぼる。

ただ、食べ物に関しては、在来の食品もかなりある。西洋料理とのハイブリッドがなりたった品も、すくなくない。のみならず、中華料理も愛好されている。住宅づくりでは、在来造作の影がうすくなってきた。洋風の感化をうけた造形が、一般的になっている。衣服の場合もそうだが、中華文明の影響は、ほぼ見られない。がんこに残存する和風の伝統は、床の上で靴をぬぐ暮らしぐらいか。いっぽう、会日の和服は、礼装や遊び着の一部でしかありえない。

さて、東アジア諸地域も、19世紀以後は、西洋化の波をかぶっている。この研究会では、それぞれの地域における衣食住、生活風俗の推移をおいかける。その変容ぶりを、近代日本におけるそれと、比較検討していきたい。諸地域の西洋化にはどのような差違、あるいは特性があったのかを、うかびあがらせるつもりである。

<研究代表者>

井上 章一 国際日本文化研究センター教授
斎藤 光 共同研究員

<本年度研究会開催予定>

5回